



TITLE:

七月ノ天象/ 八月の天象

AUTHOR(S):

CITATION:

七月ノ天象/ 八月の天象. 天界 1921, 1(9)

ISSUE DATE:

1921-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159587>

RIGHT:

七月ノ天象

太陽 四日午後五時、遠地点通過、地球より三八七一万里。

八日午前二時、小暑節。二十三日午後七時半巨蟹宮より獅子宮に入る、大暑

月 十二日午後十時半、新月

二十日午前九時 上半月(乙女座)
廿八日午前十一時 下月(山羊座)

水星 月初は宵の星だが太陽に近くて見えない。八日下合、その後曉天の星となり、二十日頃から双子座に見える。

二十九日最大離隔西二十度

金星 曉天で鮮かな明星ふり。

二日最大離隔分。此日また
月に掩はれる。時刻は午後二時、肉眼でも見える。

火星 太陽の向ふ側で双子座を順行中。距離最遠、觀望不適。

木星 獅子座と共に大ぶん西に傾く。光も衰ふ。しかしそれでもやはり天中での明星には違ひない。

土星 獅子星を順行。木星の御伴は依然環はまた輝かないで益々細くなるばかりだから強力の望遠鏡でなくては見えない。

天王星 やはり水瓶座う星の西南隣で。しばらく逆行。

海王星 蟹座が星の東北を順行中であるが漸次太陽に迫つて來るので觀望不適

八月の天象

太陽 八日午前十一時半。立秋節。
二十四日午前二時、獅子宮より處女宮に入る。處暑節。

月 四日午前五時 新月

十日午後十一時 上半月 (天秤座)
十九日午前〇時半 滿月 (水瓶座)
二十六日午後十時 下半月 (牡牛座)

水星 月初、曉の星であるが、漸次太陽を追ひ、二十三日上合となり、それから宵天に移るが、觀望不適。十一日拂曉火星に近づくのは一寸見もの。

金星 遊星中で見易いのは此の星ばかり。相變らず毎曉東天に巨光を放つ。視直經十五秒。

火星 始終曉天に見ゆる筈だが太陽に近いので困難である。十一日水星と近づく(視距離十一分)のは望遠鏡で面白い見ものである。

木星 宵の西天の獅子座を順行中
土星 同じく西天に木星と同伴す。四日以後久しぶりに又美しい輪が見に出す

天王星 水瓶座の星の西南を逆行してゐる。肉眼で好い眼の人ならば見ゆるだらうが、まづ双眼鏡のしろ物だ。

海王星 太陽に近いので駄目。六日は合。
ペルセウス流星群 十日から十二日迄毎夜、夜半以後ペルセウス座の星の輻射點から盛んに飛ぶ